

はじめに

はじめに

最近、ほとんどの大学・高専で、工学教育の中に「工学倫理」の授業科目を開設するようになった。

「工学倫理って何だ。大学生にもなって、何でいまさら道德教育か。」と思われるかもしれないが、「工学倫理」はそれほど単純な科目ではない。

科学技術者が遭遇する倫理問題には、「善いことをせよ、悪いことはするな」の単純な道德律だけでは解けないような問題が多い。

例えば、ある行為について、明らかに善と明らかに悪の間に連続的に変化するグレイゾーンがある場合に、どこに善悪の境界線を引くか？あるいは二つの責務の間で、あちらを立てればこちらが立たないといったジレンマが生じた場合に、どのような決断をするか？文化・価値観の違いに基づく国際トラブルに、どのように対処するか？など、行為の意思決定が難しいケースが多い。

このようなケースに直面したとき、明確な倫理的思考力を持っていない科学技術者は、組織の中で圧力や習慣に惑わされたり、厳しい競争社会の中でつい誘惑に負けたりしがちだ。倫理的危機になりそうな問題を事前に察知して不祥事を起さないようにする、そのような能力が今、科学技術者に求められている。

さらに、工学倫理が対象とする領域は、このような科学技術者個人の行為に係わる倫理問題だけではない。次のような問題も工学倫理は対象にしている。

科学技術は本来、世のため人のために役立つはずののだが、科学技術者によって開発された科学技術は開発者の手から離れて一人歩きを始め、ときに予期せぬ暴走をして人類に大きな災いを与えることがある。原子爆弾の開発、戦後の公害、最近の地球環境問題などはその典型的な例だ。このような科学技術の暴走に対し、開発した科学技術者に責任はないか？あるとしたら、それはいかなる責任か？

また、科学技術の高度化に伴い、原子力発電などのようにいったん故障が起るととんでもない大きな被害をもたらす技術や、遺伝子組換え作物のようにリスク未知の新技术が開発されている。フロンやアスベストのように、これまで長年にわたって安全で有用とみなされ多用されてきた物質が突然われわれの健康や生活をおびやかすようになった事例や、逆に人類の未来が危ないと大騒ぎされた環境ホルモンが実はそれほどでもなかったという事例もある。このように未知あるいは不確実なリスクに対して科学技術者はどのようなプロセスで意思決定をすべきか？

20世紀後半、社会主義との経済戦争に勝利した資本主義社会は、さらなる繁栄を目指して新自由主義を掲げ、規制緩和を進めた。それは格差拡大、弱者切り捨ての非情な競争社会だった。雇用も年功序列型から能力・成果主義に変わった。このような競争社会は人心の荒廃もたらした。企業は利益優先・安全軽視、人は利己主義に走り、科学技術への信頼を裏切るような事件、事故、不正行為が増加した。今、改めて、企業の社会的責任とは何か？科学技術者の社会的責任とは何か？が問われている。

この講義では、このように「科学技術者はいかに行動すべきか」だけでなく、「人間・社会・自然との係わりの中で科学技術はいかにあるべきか」、「科学技術に携わる組織（企業）はいかにあるべきか」といった課題にも取り組む。

科学技術者を目指す学生諸君が、この講義を通して科学技術者の使命と責任を自覚し、倫理的思考力を修得することを期待する。

2011年3月の福島第1原発事故をうけて講義テキストの内容を増補、改訂しました。

2012年11月1日